

コミュニケーションへの積極的な態度を育てる小学校外国語活動

八 卷 充 憲〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター研究協力員〕・牧 原 勝 志〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

A Practice of Foreign Language Activities in Elementary Schools Fostering Positive Attitude to Communication

YAMAKI Mitsunori・MAKIHARA Katsushi

キーワード：小学校外国語活動、学習指導要領、コミュニケーションへの積極性、授業づくり、
子どもの気付き

1 はじめに

小学校における英語教育は、いくつかの私立学校においては明治時代から行われているが、公立学校での英語教育について検討が始まったのは、昭和61年の臨時教育審議会答申にある「英語教育開始時期の検討」以降である。

平成4年から研究開発が始まり、平成10年の学習指導要領の改訂で、「総合的な学習の時間」の国際理解の一環としての英語活動が全国で行われるようになった。そして、平成18年に中教審外国語専門部会から「高学年において、週1回程度について、共通の教育内容を設定することを検討する必要がある」という報告がなされ、平成20年1月の中教審答申に、小学校5・6年生で「外国語活動」の必修化が提示され、同年3月に新学習指導要領が公示されたわけである。

これにより、「外国語活動」に目標・内容・方法が置かれ、「聞く」「話す」を中心とした活動を行う中で、コミュニケーションへの関心や態度を育てることが主なねらいとして期待されている。

そこで、本稿では新学習指導要領における外国語活動の目標・内容を考慮しながら、コミュニケーションへの積極的な態度を育成するために、どのような授業を展開していけばよいかについての考察を述べることにする。

2 テーマ設定の理由

平成10年度以降、小学校における英語活動が少しずつ広まりを見せ始めるにつれ、方法論的に、中学校の英語科教育に向けての準備といった誤解・見方があるように思われる。確かに、扱う言

語材料や場面等は中学校のそれとつながるものであり、中学校学習指導要領にも小学校外国語活動の経験を踏まえた指導について述べられている。

しかし、小学校においてはあくまで「コミュニケーションへの積極性」を中心に学習が展開されるべきである。その理由について以下の点が考えられる。

- 中学校段階よりも、思い切った表現（ジェスチャーや声量等）に取り組みやすく、コミュニケーションを図る楽しさを体感できる。
- コミュニケーション活動に積極的に関わることで、「覚える」よりも「使う」学習スタイルに意欲をもつことができる。
- これまでの中学校以上の英語教育では、音声と文字が同時に指導された。そのため、英語嫌いが増えたという報告もある。小学校で音声に十分馴染ませた後、中学校で文字や文法に触れさせるようにタイムラグをつけることで、音声と文字がスムーズにつながることを期待できる。

以上のような理由から、本研究テーマを設定し、実践を行うことにした。

3 小学校外国語活動のとらえ方

新学習指導要領における小学校外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」である。

文頭の「外国語を通じて・・・」とあることか

ら、小学校では外国語の習得が主目標ではないことがうかがえる。また、「体験的に理解を深め」から、活動を通して行うことが意図されていると理解できる。

この部分が、今後の小学校外国語活動の授業の方向を示している。つまり、「歌やゲームなどの活動を通して、音声に触れさせながら自然に英語を身に付けていく」スタイルである。実際、こうした内容で授業を構成している小学校がおおたを占めている。(図1参照)

過程	主な学習活動
導入	1 学習の雰囲気作りをし、学習内容をつかむ。(挨拶、歌、スキットを見る、目当てを立てる等)
展開	2 活動を通して、英語表現への親しみや異文化理解等を深める。(ゲーム、ごっこ遊び、スキット、チャンツ、調べ活動等)
終末	3 今日の学習を振り返る。(スキット発表、感想の交流、自己評価等)

(図1：小学校外国語活動の1単位時間例)

こうしたスタイルで行うことで、「英語っておもしろい」と考える児童が増えてきたことは、これまで多くの実践校の報告書からもうかがえる。

しかし、このことについては違った側面も見られる。つまり、「なぜ英語が楽しいか」についての意見は「ゲームができる。」が圧倒的に多い傾向にあるからである。これは「英語が楽しい」というよりも「英語の授業が楽しい」であり、さらに加えれば「英語のゲームが楽しい」になる。

(もちろん、これ以外にも楽しい理由はあるが)

小学校外国語活動で求めるものは「コミュニケーション能力の素地」であり、それはやがて「コミュニケーション能力の基礎」「コミュニケーション能力」へと発展していくものでなければならない。

小学校外国語活動は、“funny”ではなく“interesting”であるべきだと考える。楽しく英語に触れさせ、慣れ親しませることのみが先行しすぎて、「学び」の視点が薄くなってしまわないように、私たちは、今一度、小学校外国語活動の

目標・内容・方法を総合的に見つめ直し、小学校における授業づくりを確認しなければならない。

そこで、授業をどのような観点から構想していけばよいのかについて述べることにする。

4 コミュニケーションへの積極性と子どもの気付き

小学校外国語活動はスキル重視ではないことが大前提といえる。どれだけの単語が理解できたか、表現法を覚えているか、正しく使えているか等ではなく、どれだけ聞く・話す活動に参加しているか、伝えよう・理解しようとする態度が見られているかが問われる。

そこで、ここでは授業の構成に関わる視点として、(1)コミュニケーションへの積極性、(2)子どもの気付きの2つについて述べる。

(1) コミュニケーションへの積極性

ここで、コミュニケーションへの積極性とはどのようなものを指すのかについて、次の事例を基に考えてみたい。

① A君の場合

A君は友達との関わりがとても積極的で、休み時間ではリーダー的な存在で遊びの中心にいる。外国語活動でも、カルタやビンゴ、インタビューゲームなどに積極的に関わっている。一方で、ゲームへの意識が強すぎて、聞く態度にムラがあり、話すときの活動もジャンケンや順番に気が向きすぎて、しっかりと発話することを面倒に感じている。

② B君の場合

B君はどちらかというとおとなしい性格で、自分から進んで話したり、活動したりすることは少ない。友達に合わせて動いている姿が見られる。外国語活動でも、前に出てモデルをしたり、感想を発表したりすることはあまり見られない。しかし、チャンツのときはしっかりと聞いて発話している。カルタやビンゴ、インタビューゲーム等でも、単語を聞き取ったり、発話したりすることが丁寧である。

①、②のような児童はどの学級でも見られると思う。ここで、私たち教師が「コミュニケーションへの積極性」をどうとらえているかで、A君、

B君の見取りが違ってくる。

コミュニケーションへの積極性とは、間違いを恐れず、進んで相手とのコミュニケーションを図ろうとする意欲や態度のことである。

ややもすると、元気よくゲームに参加している姿を見て「コミュニケーションへの積極性がある」とし、やや控えめに活動に加わっている姿を「コミュニケーションへの積極性にやや欠けている」と見なしてはいないだろうか。遊び感覚豊かな活動を通して、英語に慣れ親しませていくことは、小学校外国語活動において、とても有効なことだと思う。しかし、その質の中身を見とっていないと、真にコミュニケーションへの積極性を育てていくことはできない。そのためには、私たちが行う活動の、目標・内容・方法を、「コミュニケーションへの積極性を培う」視点から構築していくことが必要である。

例えば、「あいさつゲーム」で、何人の人とあいさつを交わせたかを競わせるだけではなく（競争の原理も必要だと考えるが）、どのようにあいさつを交わしたか、どのようなあいさつを交わしたか等、その内容についても思いを巡らせることが大切である。

“Hello.”と笑顔であいさつを交わし、終わったら“Thank you.”と笑顔で終わる。名前だけでなく、何が好きなのか、趣味は、誕生日は、ペットは等、実態に応じて内容を工夫する。そして、ゲームの終わりに、「自分があいさつをした人を紹介しよう」とすれば、あいさつを交わすときも、十分注意をはらうようになる。また、一人でも紹介をしっかりできることで、「あなたは、気持ちのいいコミュニケーションをしましたね。」と認めることができる。

活動ありきの授業には、こうした落とし穴がいくつも見られる。「楽しく」が先行しすぎて“funny”で終わっては不十分である。「楽しく学びができる」ことを忘れてはいけない。つまりは“interesting”であってほしい。

(2) 子どもの気付き

小学校に限ったことではないが、学習の始まりに「今日は何を学ぶのかな?」といった問いを子どもたちに持たせることが多い。

これまでの英語の授業は「This is～。」(近くのものを指して)「That is～。」(遠くのものを指して)といったパターンを見せられて、後はそのパターンに合わせて聞き取りや発話を行うことが一般的ではなかっただろうか。ここでは、「今日はこれをやるんだ。」といった目標がはっきりと分かるので、混乱はない。また、パターンに則って行うので迷いも生じない。しかし、必要感はまだ感じない。

小学校外国語活動でも、こうした危険性は含んでいる。「どうしてその表現を学ぶのか」といった子どもたちの意識の前に「この表現に慣れてほしい」、さらに「この表現を学習させなくては」といった思いが先行しすぎる場合である。

やはり、小学校外国語活動の場合でも「子どもの気付き」を大切に考えてほしい。子どもの気付きが学習の出発点と思うからである。

また、子どもたちが「気付く」ためには、ある程度の抵抗感や障害が必要だと考える。これは、他教科の授業づくりの際には自然に受け入れられているものだと思う。ところが、外国語活動の授業では、「何をどの程度まで教えればいいのか」、「子どもたちはどの程度まで英語を活用できればいいのか」等、明確な到達点を求めてしまう結果、「できるだけ困惑しないように。興味関心が落ちないように」と考えすぎる傾向にあると思う。

もっと具体的に言うと、外国語活動の授業が過保護の授業になりすぎてはいけないということだと思う。

子どもたちが迷わないように、困らないように手を尽くしすぎることが、子どもたちから考える必要性を奪い、子ども自らの気付きを少なくさせてはいないだろうか。

子どもたちは思った以上にタフであると思う。少々困難には「それぐらい」と乗り越えようとする。もちろん、個々の差はあるわけだから、助力が必要な子どもは教師が支える必要がある。友達同士の助け合いや学び合いからも解決が図られることもある。

コミュニケーションは、まさにそうした窮地を解決する手段ではないだろうか。小学校期に、少

しでも「英語が使えた」「英語で伝えられた」等の経験を積むことが、コミュニケーションの素地を培うことにつながると考える。

5 担任が行う意義 (TTも含め)

「小学校外国語活動は担任が進める」ことに對して、「なぜ。そんなことは聞いていない。」と困惑する声が多くある。このことについては、①財政的に専属のALTを雇用することは難しい。②小学校は担任が授業をコントロールした方がよい。といった説明をよく聞く。

①の立場は「担任が進めた方がよい」ではなく「担任で進めてくれ。」であり、担任側も「仕方がない」といった意識になり、指導についてのモチベーションは上がりにくい。②の立場になると、以下のような条件が必要になると思う。

ア 学校全体で外国語活動に取り組む態勢がある。(研究指定・協力校等の環境も含む)

イ 外国語活動を推進する係が明確にある。

ウ 外部(ALT, ゲストティーチャー)との連絡が密に取れる。(連絡係が明確であり、他の職員からの協力も得られる)

小学校では殆どの教科を担任が進める。また、校務分掌も抱えており、加えて学級経営という大きな責任もある。単純に「小学校だから担任が指導に適している」では納得いかないことだと思う。

実情は、「私も一緒に」と加わる担任もいる一方で、「じゃあ、この時間をお願いします。」とあっさり引いてしまう担任もいる。これは担任の意識の低さだけの問題ではなく、前述した条件が揃っていないことも関わっている。

以下のような例がある。

「私は外国語活動は反対」と、当初はお任せムードだった先生が、外国語活動担当とTTで1年間授業を行ううちに、「自分の学級で研究授業してもいいよ。」と言ってくれるようになった。また、ある担任は独自に「ALTと体育をしよう」と、授業の中で子どもたちとALTの自然な触れ合いを設定した。これは、事前に担任との打合せでALTへの連絡を取りながら計画していた。

担任が授業をコントロールすることの意義は言

うまでもなく、「子どもの身近な理解者」であり、「子どもの普段を知っている」ことにある。だからこそ、学級の実態に応じた活動を柔軟に実施することが可能となる。「英語は苦手」が「外国語活動の授業ができない」にはならない。このことを、学校全体で享受し、全体で進めていくことが「担任が進める」意義を確かなものにしていくと考える。

加えて、学級担任が外国語活動を進める上で障害となっているものが「どんな授業をすればいいの。」といった戸惑いである。「小学校は楽しく行ってくればOK。」と意識的に理解できても、授業を具体的にイメージできない。この解決法として、どのような活動をどのように進めればいいのかといったワークショップが必要であると考え

る。ある実践で、ワークショップを月1〜2回程度校内で行った。これにより、学年を問わず、全職員で多くの活動を実習することができた。また、「外国語活動をするに抵抗が小さくなった。」「自分のクラスでも試してみたい。」等の肯定的な意見が増えたという例もある。

こうした条件の整理が、「私でもできる。」という意識を強めていったと考える。担任が進める授業を推進するには、「担任でも十分できる」ことを意識付ける取組、手立てが必要になる。

6 コミュニケーションへの積極的な態度を育む授業づくり

(1) 英語を使おうとする意欲をもたせる授業づくり

① 第5学年「好きな物を伝えよう」

この単元は外国語活動が始まって間もない1学期に扱った。主題は「自己紹介をする」。その発展として自分の好きな物を伝える活動を取り入れた。

ア 導入

あえてジェスチャーのみで好きな物を伝える活動を行った。最初に担任と外国語活動係(以降JTE)がモデルを示し、続いて児童に行かせた。

ここのねらいは、ジェスチャーの効果も認め

つつ、音声があればもっと便利であることに気付いてもらいたいことであった。活動自体は大変活発に行われ、楽しい雰囲気が作れた。また、活動後の感想でも「ジェスチャーが難しく伝わらなかった」といった意見が出てきた。

イ 展開

「音声」つまり言語の必要性を感じたところで「どんな表現が必要か」を尋ねた。一方的に「名前」「年齢」等を教えるのではなく、児童からの気付きを生かすことが目的であり、それが児童にとって必要な表現となる。

出てきたのは「名前」「好きな物」といった表現の他に、「目を見る」「笑顔」「声をはっきり」といった態度面もあった。こうした姿がコミュニケーションへの積極性を高めると考える。

実際に行った活動は、自分の好きな物を伝える「サインゲーム」と「ビンゴゲーム」を扱った。第1時の学習だったので負荷をあまり感じさせないように配慮したが、ゲームの順番としては「聞く」から「聞く・話す」とステップをもう少し考えてもよかったと思う。



モデルを示し、どのような表現が必要かを児童に尋ねる（HRT）。

② 第5学年 「オリエンテーション」

外国語活動のオリエンテーションで「〇〇は何色」というクイズをした。例えば「ウサギは何色」と尋ねて、その答をプリントに書く。「白」と答える児童が殆どだが「茶色」「黒」も出てくる。その色を英語で言おうとする活動に挑戦させた。

ア 導入

身近なものの色についての意識をもたせるために、「バナナ」や「イチゴ」といったほぼ同じ色が出てくるものを最初に出した。予想どお

り「バナナは黄色」「イチゴは赤」となった。

そこで「Banana is 黄色.」「Strawberry is 赤.」と表現させた。色も英語で言ってみようとなったので“Banana is yellow.” “Strawberry is red.”の表現を練習した。

イ 展開

そこで、今度は「りんご」「うさぎ」と問題を変えたところ、「りんご is red.」「ウサギ is white.」のように表現する児童が出てきた。日本語と英語の混ざった表現ではあるが、伝えることに着目しているので問題はない。ただし、りんごやうさぎを英語で言ってみようとする意識が児童にはあるので、“Apple is red.”

“Rabbit is white.”のように聞き返させて表現を教えた。ここで、「先生。茶色のウサギは何て言うの。」と尋ねてくる児童がいたので「茶色 is brown.」と教えた。



ビンゴゲームで好きな物を伝え合う活動の様子。

授業で使ったシート

活動シート① “Colors” Name[]				
1 ～ といえば 〇色！				
～	りんご	バナナ	うさぎ	
色				
◎ 自分で問題を作って 友達の答を調べよう。				
[] といえば ()				
名 前				
色				
2 〇色と言えば ～。				
色	白	黒	みどり	
～				

また、「白と黒の混ざったのはどう言うの。」と尋ねられたので「白 is white. 黒 is black. だから white and blackでどうかな。」と返した。「2つの

色を並べればいいのか。」そうとらえた児童は「黄緑」のときに「yellow and green」と答えてくれた。素晴らしい解答だと思う。

このように、全てを英語では言えないが、言えるところは使おうとする姿勢を小学生の頃から育てていくことがコミュニケーション能力の素地につながると考える。

③ 第6学年「3ヒントクイズをしよう」

この単元は2学期の中盤に設定した。6年生は去年の活動経験もあり「色」「数字」「果物」といった身近な単語についてはある程度使える。また、「My name is 〜. "I like 〜."等の表現も慣れている。そこで、今度は自分の使える単語やジェスチャーを駆使して伝えることに挑戦させた。

ア 導入

JTEが16枚の動物の写真を黒板に貼る。ここで「今日は動物の英語を使うの。」と声が出てくる。こうした声が出てくる雰囲気も大事にしたい。使った写真の動物はゾウ、キリン、コアラ等児童がよく知っている物から、アリクイ、アルマジロといった見慣れない物まで幅広く扱った。

JTEがここで4～5種類の動物の写真を集め「これは仲間です。共通点は何かな。」と尋ねる。ここでは日本語で進めているのであまり外国語活動といった雰囲気はない。しかし、ここでの活動を以降の外国語活動に生かすねらいがある。

ちなみに、「仲間」とした条件は「顔が右向き」「しっぽが映っている」「1匹しかいない」「影がある」等、意地悪クイズのようなものであった。案の定、解答が出ると「何それ」と児童からのブーイングがあったが、それでも「今度は何を共通点にしたのか」を探ろうとする姿が見られた。

イ 展開

今度は、児童たちにクイズを出してもらう番にした。そこで、第1段階として仲間分けクイズを、第2段階として3ヒントクイズに挑戦させることにした。ここで条件を「自分の使える英語やジェスチャーで出す」「グループで共同作業とする」とした。

20分ぐらいである程度の形はできあがったが、児童たちは今一つ納得していない様子があった。これは「伝えたいことが言えない」ことへの不満である。こうしたときは“〜 in English.”と尋ねるようにしている。「しっぽ in English.」「木の実が好き in English.」のように尋ねてくる。

こうした活動を重ねることで「伝える」ことへの積極性を高めていきたい。

(2) 「伝える」意識を高める授業づくり

① 第5学年「買い物に挑戦」

この単元は、外国語活動ではポピュラーな活動の一つである。身近な活動場面であり、これまでのあいさつや食べ物などの英語が使えることも、児童のコミュニケーションの積極性を引き出せる教材と考える。

本時は、これまでの学習のまとめとして、買い物ごっこを行うためのスキットの学習を行った。基本の会話にある程度慣れてきた段階で、「使ってみたい表現はありますか。」の問いに「値引き」「サービス」「安売り」等があげられた。このように、使いたい表現を引き出した後に「その言い方は〜だよ。」と指導するばかりではなく、「これまでの言い方やジェスチャーでもできないか。」と返すと、それなりに工夫した表現の挑戦する姿が見られた。

ア 導入

これまでの授業で、買い物時に必要と思われる表現を練習してきている。それらの表現は、本単元の第1時に児童から導き出されたものである。こうした表現をペアで練習したり、サインゲーム等で繰り返し使わせたりすることで慣れ親しませた。

イ 展開

カードに品物を書かせて、買い物の雰囲気を出させた。ここでは、持ち金を設定し、その中でぴったりの金額に収まるように買い物をするゲームを行った。“Do you have〜?” “How much?”等の会話を使って、買い物に挑戦していた。

このように、ゲームの中にも会話を組み込めば、その延長にスキット活動が組み込めると考

える。

② 第6学年「形で遊ぼう 第1時」から

ここでは「形」の英語に慣れ親しませ、この後に扱う「外国へ行こう」の国旗クイズにつなげるねらいがあった。

ア 導入

国旗に使われる主な形を扱った。円、三角形、正方形、星、ひし形、五角形、六角形などである。活動の中でも“Make a circle.”のような指示をしているので耳に慣れたものもある。三角形を出したときも「トライアングル」と答える児童が多かった。このとき、トライアングルの意味に3が含まれていることを話したところ、「五角形」をだしたときに「five angle」と答えた児童がいた。解答は“pentagon”なのだが、まさしく、こうした気付きを求めていたわけ、大変素晴らしい解答だと賞賛した。

イ 展開

「赤い三角形」は“red triangle”と伝えることを、ゲームを通して慣れ親しませた。この表現は国旗クイズにつながる。使ったカードは円、三角形、正方形、ひし形、五角形の5種類の形とそれぞれ赤、青、黄、緑、紫、ピンクの6色用意した。これらのカードで、カルタゲーム、ついで同じ形を4枚集めるゲーム、色も形も同じ物を4枚集めるゲームと徐々に「聞く」から「話す」へとステップアップを図った。

(3) 文字と音声のつなぎ

小学校外国語活動では、文字指導はあくまでも音声中心の活動を補助する程度にとどめるとされている。それは、外国語（ここでは英語）の学習が音声と文字を同時期に始めたことから生じる困難さに配慮してのことである。このことについては、いくつかのデータが報告されており、音声と文字の学習時期をある程度ずらす、具体的には音声を3年間じっくり取り組ませてから文字指導に入った方がよいとする意見もある。

実際、英語ノートには「アルファベットで遊ぼう」といった単元があり、アルファベットが紹介されている。そこで、覚えようとするのではなく、まずは形に慣れようとする活動を取り入れた。

① 第6学年「アルファベットで遊ぼう」

ア アルファベットを作ろう。

児童はローマ字の学習でアルファベットには触れている。しかし、指導計画上は3時間程度しかなく、自分の名前を書くことも難しいのが現実である。そこで、まずはアルファベットを大文字のみ紹介し、その発音の練習を行った。次に、1文字を選び、4～5人のグループで人文字に挑戦させた。形をお互いに確認しながらT, O, L等の比較的簡単なものからA, B, P, Gと難しいものまで行った。

イ アルファベットの発音に慣れる。

Aを「エイ」と発音するが、これはアルファベットの名前を発音していることになる。英語は単語によって同じアルファベットの発音が異なってくる。これが実は中学生にとっての悩みでもある。例えばAでant, appleに加えてairplane, Aprilを紹介するとそれが伝わる。

こうした音声と文字のつなぎについて、6年生では授業の冒頭で「今日のアルファベット」として数分間の活動を行った。ここでは、Bを「ビー」と発音させた後、book, bear等の単語に触れさせ、児童からも意見を出させる。こうした活動で、アルファベットと音声に意識をもたせられればと考える。

② 第6学年「誕生日を教えよう」

この単元は、1年間の月の英語に慣れ親しむものであり、「自分の誕生日を教えよう」とする目的をもって活動を設定した。ここでは、月のイラストの下に単語を記入したカードを用いた。もちろん、音声活動中心で進めたが、文字にも少し意識をもってほしいという意図はあった。

ア 発音からの気付き

第2時で、月の発音をチャンツで行ったあと、「発音と英語の文字に関係はないかな。」と尋ねて再度チャンツを行った。すると、「9月から12月まで、後の言い方が似ている」と意見が出た。確認で全員に発音してもらおうと「後がバーだ。」となった。

そこで、もう一度カードに着目させ、文字との関係を探らせると「同じになってる。berになってる。」と、同じ発音が同じ綴りになって

いることに気付いた。すると、「J」で始まる月が3つある。1月、6月、7月。」と新たな気づきも出てきた。このように、音声と文字には、何か関係があることに意識をもつことができた。

7 成果と課題

(1) 成果

コミュニケーションへの積極的な態度を育成する授業づくりとして、以下の視点からの授業づくりが効果的であると考えます。

① 子どもの意識の流れを生かす授業づくり

どの教科でも「子どもの意識の流れを生かす」ことが必要である。それが主体性、積極性を生み出すことにつながるからである。つまり、問題解決学習の流れを取り入れることである。

例えば、導入では、「はっきり伝えるためには表現が便利」という課題をもたせる。(ジェスチャー伝言等非言語活動を取り入れた)。この課題を解決するために、「表現を練習する」必要性が生じる。次に必要な表現を「試す」場を設定することで、さらに慣れ親しみを深化させていくことができると考える。外国語活動にあっても「問題解決学習」的な学習過程を生かす必要がある。

② 必要感をもたせる場面づくり

英語の表現に必要性を感じさせることで、児童はより積極的に外国語活動に取り組むことができる。それは、「覚えなくては」ではなく、「使いたい」気持ちがベースになるからであると考えます。その例として、買い物活動で「シャツをください。」という表現“Do you have shirt?”を基本にした後、いくつかの色から選ぶ場面をモデルで示した。そこで、“Do you have red shirt?”という表現の必要性が出てきた。自分の意思をより正確に伝える表現の便利さに気付くことで、今後の外国語活動においても、自ら表現を求める姿が期待されると考える。

(2) 課題

① 学習過程の研究

小学校外国語活動は、言語材料を用いてコミュニケーションを図る活動なので、ある程度の「聞く」「話す」技能が必要になってくる。これのみ

を追究することが目的ではないが、必要になってくることに変わりはない。小学校においては「聞く」「話す」技能を、ゲームや制作活動等の遊び感覚豊かな活動で身に付けさせていくことが適していると考えますが、時にゲームのみに執着させてしまい、活動の目的であるコミュニケーション能力の素地や異文化理解が薄くなってしまった反省もある。学習過程を確立させていくことが、今後の大きな課題であると思う。

② 教職員(担任)の支援および研修

これまでに述べているように、授業を進める担任の支援と研修の推進は必要不可欠だと考える。

「英語は得意、不得意」がモチベーションの要因にあることはうなずける。しかし、それだけでなく、「では、どのように進めるの。」「高学年だけの問題でしょう。」等の素朴な疑問に対応し、支援できる環境も必要になる。

また、校内研修だけでは、学校の研究テーマとの関わりで十分に研修に取り入れることが難しいこともある。

地域(教育委員会も含め)を巻き込んだ研修会等が今後ますます必要になってくる。

8 おわりに

授業は、教師が子どもたちに気付かせたい視点をいくつも持ち、どのような活動を取り入れるのかにかかっている。外国語活動の授業は「英語の授業」のみではなく「コミュニケーションの授業」でもありたい。そして、外国語活動をとおして、「日本と他国の同じところ、違うところ」を気付いてくれたら、そして、「他国の人ともっと分かりたい。」という気持ちを少しでももてるようになったらと願っている。それは、きっと英語が堪能になるとかならないとかの次元の話を超えるものになると思う。そのような授業を目指して取り組みを続けていきたい。

【参考文献】

「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」平成20年8月 文部科学省

「小学校英語活動実践の手引き」平成13年8月 文部科学省